

読谷

中学校

平和にのりて考える

読谷中学校 一年 泉田 実

今日から数えて七十四年前、あり、その地獄をあらためた戦争が終結しました。沖繩での地上戦にふり、人々が負った傷は今でも消えず残っています。

平和学習で読んだ新聞のインタビュー記事に、渡嘉敷島出身の金城さんの話があった。三月二十七日、渡嘉敷島に米軍が上陸しました。

た、<sup>妻</sup>子供に木を振り下ろす人、かま、石

包丁を伸る人、地獄としか言ひふりかた、光

景が広かりました、おんね、生々残るの、か何

子りも恐し、か、た、の、かす、金城さんの話を

読むと、渡嘉敷島のト々を初めとして住民の

人、<sup>被害</sup>は日本軍に追いつめられて自決した人が

多いのでは？と感じました、なぜそんな事に

な、た、の、か、し、よ、う？日本軍は、住民を守って

く、水、る、は、ず、だ、た、の、に、、、、、、、、、、、、、、、、、、

私は、父も母も祖父母も、沖繩県出身の大

読谷

中学校

人が身内に一人もいません。ですから、詳しい話を聞いた事加なければ、五年生まで平和学習をしてもどこか他人事に感<sup>原</sup>じていました。でも六年生のおとき、南風陸軍病院<sup>豪</sup>を見学しました。さまくても、息<sup>息</sup>苦しくて懐中電灯を消してしまえばま<sup>く</sup>り、急に怖くなりました。戦争が始ま<sup>た</sup>ら私もこの場所に入るんだらうか？それとも入水でも分えず、死んでしま<sup>う</sup>のだからか？ま<sup>ま</sup>、た<sup>た</sup>く他人事ではなく、戦争は身近にあ<sup>っ</sup>たことを知りました。学校で

ある先生はか二人の話をしてく水ま<sup>ま</sup>した。真面目な話、戦争をし<sup>ら</sup>うと<sup>い</sup>う考えの人<sup>は</sup>、た<sup>た</sup>く士<sup>人</sup>として、今の日本は戦争の方<sup>い</sup>向<sup>か</sup>って<sup>い</sup>る<sup>よ</sup>。その話を聞いた時、私はとてもお<sup>な</sup>い<sup>不</sup>安にお<sup>そ</sup>わ<sup>か</sup>ま<sup>し</sup>た。戦争が今日お<sup>こ</sup>な<sup>っ</sup>てもお<sup>か</sup>し<sup>く</sup>な<sup>い</sup>のでは？そう考えると怖<sup>く</sup>なり<sup>ま</sup>した。又千ドウタカラ、そう言い聞かせ水<sup>を</sup>育<sup>つ</sup>た島民でさえも生き残るのが怖<sup>く</sup>なる。そんな戦争は、日本は船をま<sup>さ</sup>る<sup>ら</sup>し<sup>て</sup>い<sup>ら</sup>る

読谷

中学校

のかもしれない。関係ない私達を日本という  
 船にのせたまま。日本という国は、水だけ  
 の人々から命を家族を奪えば気が済むのだら  
 うと思いましたが、家族を失った悲しみは保  
 持にしか分らない。その思ひます。もし  
 ておかげで、その悲しみは減らすなければ  
 と思ひます。

沖繩での地上戦、爆弾、銃撃、大砲、様々  
 な武器が大嵐の予りに降りそそぎ、日本軍に  
 よって君いつめり水で自決する人々。あり

つたけの地獄をあつめた戦争と呼ばれるほ  
 どの戦争を二度とおこしてはならないと私は  
 思ひます。そのために私にできることは、と  
 考へたとき、私は少し悲しくなりました。政  
 治面では、何もできません。私にできる事は  
 戦争体験者の方の話を悲愴な戦争を忘れず、  
 心に刻み、次世代にうながすこと。ただ一つで  
 す。たか加一つ、でも忘るても大切な事、私は  
 七十四年前のあの日のことを忘れません。  
 おじい、おばあ、あの日のことを忘れません。

